

ドイツの中等地理教科書『Diercke Geography Bilingual』 における国際理解単元のコンピテンシー育成

由井 義通・阪上 弘彬*・村田 翔**・横川 知司**・潘 意涵**・佟 亜斎娜***・
安倍 成美****・池田 葵****・倉本 尚****・岩佐 佳哉****・池田 直樹****・
植野 裕行****・富田 大智****・藤村 大智****・頼富 収吾****

(2018年12月10日受理)

Competency of Education for International Understanding:
By analyzing *Diercke Geography: For Bilingual Classes* in Germany

Yoshimichi Yui, Hiroaki Sakaue, Sho Murata, Satoshi Yokogawa, Yihan Pan, Yaqina Tong,
Narumi Abe, Aoi Ikeda, Takashi Kuramoto, Yoshiya Iwasa, Naoki Ikeda,
Hiroyuki Ueno, Daichi Tomita, Taichi Fujimura and Shugo Yoritomi

This paper aims to clarify the characteristics of learning units on Education for International Understanding (EIU) and their structure, appropriate geographical teaching materials on EIU, strategies for competence acquisition, and perspectives of ESD within learning units on EIU by analyzing two learning units “Globalisation” and “Global Disparities” in the geography textbook for bilingual lesson “*Diercke Geography: For Bilingual Classes*”. The results of the analysis showed that 1) “Globalisation” focuses on the theories of globalisation and “Global Disparities” aims to learn not only theories but also regional images; 2) Competency is repeatedly acquired through different learning activities; 3) “Global Disparities” is designed from the viewpoint of “think globally, act locally”.

Key words : Geography education, Textbook for bilingual lesson, Germany, Competency

1. はじめに

平成30年の学習指導要領の改訂に対応して、新しい教科書づくりが進められている。地理の場合、高等学校地理歴史科の大きな改訂により、必修科目の地理総合と選択科目の地理探究が新設された。今回の改訂では、ユネスコが主導するESDの視点が強く反映されており、環境問題や貧困などの現代的な課題を克服し、持続可能な社会を形成するために必要な資質・能力の育成が求められている。ESDというと、日本では文部科学省のホームページ¹に記載されたモデルの影響もあって、環境学習や国際理解学習、あるいは防災学

習やエネルギー学習などのコンテンツ学習に特化しすぎる傾向にある。しかしながら、ユネスコによるESDで育みたい力は、①持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）、②体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方）、③代替案の思考力（批判力）、④データや情報の分析能力、⑤コミュニケーション能力、⑥リーダーシップの向上、などの具体的な能力育成が目的となっている。このような状況を鑑みるとわが国においてESDの普及と徹底を図るには、コンテンツ学習においてどのようなコ

* 兵庫教育大学・助教, ** 教育学研究科博士後期, *** 広島大学地域経済システムセンター・研究員, **** 教育学研究科博士前期

¹ 今日よりいいアースへの学び ESD 持続可能な開発のための教育

<http://www.esd-jpnatcom.mext.go.jp/about/index.html> (最終閲覧日:2018年12月5日)

ンピテンシーを図ることができるかを明示し、どのように学習内容と学習過程を改善していくのが課題となっている。

そこで本稿では、ESD の普及に積極的に取り組み、ESD をカリキュラムに反映させているドイツの地理教科書を分析することによって、地理教育においてどのように ESD に関するコンピテンシーの育成を図っているのかを明らかにすることを目的とする。ドイツの地理教科書を取り上げた理由は、州ごとの教科の教育スタンダードにおいて ESD への取り組みが強く反映されている点と、国際地理学会 (IGU) による地理教育憲章やルツェルン宣言の作成にあたって、ドイツの地理教育研究者が中心メンバーとして活躍しており、ESD に関連した教科書の内容構成となっているからである。

そのために、本研究はドイツのバイリンガル授業用の地理教科書 *Dircke Geography: For Bilingual Classes Volume2* における国際理解教育に関するグローバリゼーションと地域格差をテーマとした二つの単元を対象として、ドイツにおいて国際理解に関わる学習の内容構成がどのようになっているのか、資質・能力の育成をどのように図っているのか、またそのためにどのような地図資料や統計資料を利用しているのか、さらに国際理解単元が ESD の観点をどのように組み込んでいるのかを解明することを試みる。この二つの単元を取り上げたのは、日本の教科書においてこの二つの単元の内容は組み込まれているものの、大単元として独立した単元構成となっていないため、地理学からの国際理解の新しい取り組みとしてどのように資質・能力の育成を図り、どのような学習内容の構成とするのが良いかを検討するためでもある。

II. ドイツの地理教育事情

1) 地理カリキュラム動向

服部 (2007a, b), 大高 (2010), 阪上 (2018) がすでに報告しているように、2000 年の PISA ショックを契機に、コンピテンシー志向の地理カリキュラムへと変化している。

各州に教育権限が付与されるドイツにおいて、コンピテンシーの枠組み (Kompetenzbereich) は各州によって異なっている²。各州の州地理カリキ

ュラムの作成指針として示された DGfG (2017: Deutsche Gesellschaft für Geographie, ドイツ地理学会) の『ドイツ地理教育スタンダード (*Bildungsstandardsim Fach Geographie für den Mittleren Schulabschluss*)』では 6 つのコンピテンシーの枠組み (教科専門, 空間定位, 認識の獲得方法, コミュニケーション, 評価・判断, 行動) が提示されている。

2) コンピテンシーに基づく学習活動の設計

またコンピテンシーの育成が目指されるなかで、『ドイツ地理教育スタンダード』ではコンピテンシーおよびそれを構成するスタンダードに基づく学習課題事例 (*Aufgabenbeispiel*) が提示されている³。またこれらの学習課題事例が作成される際に、経験的に保障されたコンピテンシーの段階レベルモデルは依然として存在していないため、学習事例において要求されるコンピテンシーを評価するために、アビトゥーア試験統一基準 (*Einheitliche Prüfungsanforderungen in der Abiturprüfung, EPA*) の理論にならった要求領域 (*Anforderungsbereich*) を用いている (DGfG, 2017, S.30)。要求領域は I から III から構成されており、その詳細は表 1 に示す通りである。

表 1 学習活動に関する 3 つの要求領域の概要

分類	具体的内容
I	既習の言語表現・行動方法に関連した内容の再生産, 再編成に関する活動 例: 挙げる, 記述する, 表現する, 区分する, 要約する 等
II	既習の専門的内容の説明, 取り扱い, 整理, そして既習の内容, 方法, 行動を他の状況へ適切に応用する活動 例: 分析する, 分類する, (理由を) 説明する, 比較する 等
III	問題等に対する判断および評価の根拠を示す活動 例: 根拠づける, 判断する, 立場を明確化する, 解決策を説明する 等

出典: 阪上 (2018, p.99) より引用

² 各州地理カリキュラムにおけるコンピテンシーの枠組みは、阪上 (2018, pp.63-69) を参照のこと。

³ 吉田 (2012) は、初等・中等教育修了時に獲得すべきコンピテンシーを規定した教育スタンダードの各教科・学校教育段階編には、学習課題事例が提示されていることを報告している。

「既習の言語表現・行動方法に関連した内容の再生産、再編成に関する活動」であるⅠ、「既習の専門的内容の説明、取り扱い、整理、そして既習の内容、方法、行動を他の状況へ適切に応用する活動」であるⅡ、そして「問題等に対する判断および評価の根拠を示す活動」のⅢから学習活動の組織が要求されている。その際に、Ⅰでは「挙げる、記述する、表現する、区分する、伝える、要約する」、Ⅱでは「分析する、特徴づける、分類する、(事象の背景や構造を)説明する、比較する」、Ⅲでは「(問題解決のための理由を)説明する、根拠づける、判断する、解決策を述べる、立場を明確化する」という指示語が用いられている。

分析対象の教科書はドイツでの使用が想定されていることから、上述の学習活動の質Ⅰ～Ⅲを手掛かりに、教科書における学習活動について分類、分析を行う。

3) 地理におけるバイリンガル授業と国際理解

近年、ドイツの地理教育においてもバイリンガル授業が注目されている⁴。バイリンガル授業の定義はGolay (2013, 2018)によると、主として外国語でされる任意の専門教科の授業」であり、その授業の目的は「母語で従来の専門教科の授業をするように、専門的内容を教えること」である⁵。

また地理におけるバイリンガル授業の重要な点は、専門的内容の教授であり、外国語は単に活動と理解の手段のためであって、学習主題の中心となるものではない(Golay, 2013, 2018)。加えて、文化の重要な表現として言語を理解しているので、バイリンガル授業のさらなる目標として異文化理解学習(Interkulturelles Lernen)もまた含まれている⁶(Golay, 2013)。

Ⅲ. Diercke Geography Bilingual の構造

—単元「Globalisation」の場合—

1) 内容構成

単元「Globalisation」の内容構成は表2に示す

とおりである。

本単元は7つの小単元から構成され、学習のねらいから3つの学習過程に分けることができる。

小単元1と2における学習のねらいは、グローバリゼーションそのものへの理解である。小単元1は本単元の導入的な役割を果たしている。見開きではドイツのハンブルクのコンテナ船、インターネットを用いたビデオ会議、香港のディズニールランドを示した写真資料が提示され、学習課題として「あなたがとある日に使ったり消費した製品、商品を少なくとも5つ挙げなさい」といったものが設定されている。このように身近な事例の学習を通じて、学習者の生活が世界と密接に繋がっていることを気付かせる構成となっている。小単元2では、アップル製品の生産や供給拠点に関する世界地図等が資料として提示され、グローバリゼーションの概要を身近な製品を通じて説明しており、以降の学習に繋ぐ役割が強くなっている。

これを受けて小単元3と4では、グローバリゼーションがもたらした効果についてヒト・モノ・情報の移動をテーマに学習する。小単元3では交通手段を題材に、具体的な数値の変化から高速輸送の進展の理解を目指しており、小単元4では通信技術の進歩と課題に焦点が当てられている。この2つの単元では、グローバリゼーション下でのヒト・モノ・情報の移動が大きく変化していることを学習させている。

小単元5から7ではグローバリゼーション下でのモノづくりを通じた国際経済の仕組みの理解に重点が置かれている。小単元5では工業製品の生産に関する国際分業の仕組みやメリット、小単元6では企業の立地要因といった生産に関わるテーマ、小単元7では世界貿易が学習内容として示されている。

2) 学習活動

各小単元には、学習を深化させるための問い(学習活動)が設定されている。表3はその詳細

⁴ Hoffmann und Meyer (2009) は各州におけるバイリンガル授業の実施状況を報告している。

⁵ Golay (2018) によれば、1500の学校が取り組んでおり、使用する外国語としては英語が多くを占めている。

⁶ 言語と専門的内容の視点から地理におけるバイリンガル授業の目標カテゴリーは以下のようなGolay (2018)。
言語：(1) 外国語でのコミュニケーション能力、読み取り能力(読むと聴く)並びに生産能力(話すと書く)の向上、(2) 言語が使用されている国(地域)のより深い理解、それと同時に異文化理解学習の促進
専門的内容：(1) 外国語で書かれた原文(原典)を用いた取組とそれを通じた文化地理的課題の理解、(2) 洗練された意味的処理の深さを通じた使用言語での地理的専門概念によるより深い浸透

表 2 「Globalisation」の単元構成

展開	小単元	題目	内容	資料
グローバリゼーションへの理解	1	グローバリゼーション—どんな意味？	身近なグローバリゼーション	ドイツのハンブルクのコンテナターミナルとコンテナ船 (M1) ビデオチャットを通じた国際ビジネス (M2) 香港のディズニーランド入り口 (M3) シンガポール空港での飛行機のチェックインの様子 (M4)
	2	グローバリゼーション, すなわち世界は収縮している	グローバリゼーションの要因と影響 要因: 高速輸送と通信技術の進歩 影響: 国際経済 (生産の国際化)	アップルの製品の生産拠点と部品供給会社の総数 (M1) 中国のウーハンでのスマートフォン組立てライン (M2) 1700年代におけるヨーロッパ諸国の海外進出 (M3) フリードマンによる講義からの引用 (M4)
グローバリゼーション下でのヒト・モノ・情報の移動に関する理解	3	収縮している世界での輸送	輸送速度の向上 1. 海運 2. 空輸	2つの海洋をつなぐ現代化されたパナマ運河 (M1) 輸送技術と情報伝達技術の進歩により縮小する世界 (M2) 輸送と情報伝達のコスト変化 (M3) LCC (ロー・コスト・キャリア) (M4) 空輸システムモデル (M5) 主要空港 (貨物) (M6) 主要空港 (旅客) (M7)
	4	情報と伝達の技術が生活を变える	情報通信技術 1. 技術革新と情報格差 2. コールセンター	世界中を繋ぐ情報通信技術 (M1) 現代における電話通信の利用 (M2) 世界的なデジタルディバイド—手ごろな価格のブロードバンドと通信データの流れ (M3) インド対アフリカ—MEDCsにおけるコールセンターサービス (M4)
グローバリゼーション下でのモノづくりを通じた国際経済の仕組みに関する理解	5	世界的生産	生産方式の国際化 1. 国際分業	誰が車を作っているのか (M1) 自動車産業での生産動向 (M2) チェルノーモフ自動車産業で使うケーブルの製造 (M3) ボッシュ—国際的な部品提供会社 (M4) フランス—自動車の組み立て (M5) 自動車産業における社内生産割合 (垂直統合) の変化 (M6) ちようどの時間? (M7)
	6	立地要因	立地論 1. 企業の立地 2. ハードとソフト面の立地因子	シドニーの交通インフラ (M1) ヴィディン (ブルガリア) とシュツットガルト (ドイツ) の立地コストの比較 (M2) ベトナム—安価な労働力 (M3) アメリカ—専門家と研究施設 (M4) ハードとソフトの立地因子 (M5)
	7	世界貿易	貿易の仕組み 1. 原材料の立地と輸出入 2. 輸出・輸入の価格変動	商品の世界戦略—船から降ろされる新車 (M1) 重要な原材料の世界貿易—商品の生産の基礎 (M2) 原材料と製品の価格の推移 (M3)

である。小単元 1 と 2 については多くの学習活動が I ~ II に分類できることから、グローバリゼーションに関する事実の確認、およびグローバリゼーションに関する基本的な理解に学習目標が置かれておりと解釈できる。とりわけ小単元 1 では、自分たちの生活が世界と密接につながっていることに気付かせることを、小単元 2 では、モノの生産と消費の位置関係およびグローバリゼーションの歴史について理解を目指すものである。

小単元 3 と 4 については、理論・概念に関する II、現象の理由を述べたり、ある現象によってもたらされる影響を判断したりする III が中心となっている。II に関しては、小単元 3 では空輸システム (ポイント・トゥ・ポイント、ハブ・スポーク)、小単元 4 ではデジタル・ディバイドが生徒に獲得が目指される理論等である。

III においては、縮小する世界の理由 (小単元 3)、

情報通信がない世界での自分の人生を考える、コールセンターがアフリカ大陸に与える正負の影響 (小単元 4) が該当する学習課題である。

なお I に関する学習課題に関しては、小単元 3 では輸送と費用の関係性を理解するものであり、小単元 4 では図のデータをまとめることとなっている。

小単元 5~7 についても小単元 3~4 と同様であり、法則性・理論 (小単元 5: OME, 小単元 7: 貿易の仕組み) に関する II、現象の判断・評価 (小単元 5: 生産形態の問題点と可能性, 小単元 6: 一部の LEDC の繊維産業発展の要因, 立地因子の優先順位) に関する III が主となる学習課題である。また I に関する学習は、生産・貿易に関する基本的な立地条件を確認するものである。

表3 「Globalisation」の学習活動

小単元	学習活動	分類
1	①あなたがとある日に使ったり消費した製品、商品を少なくとも5つ挙げなさい。 b)それらがどこから来たのか調べなさい。	I
	②写真M1-M4から見つけたグローバリゼーションの側面を説明しなさい。	I II
2	①アップルの様々な生産拠点と供給元がどこにあるのかを記述しなさい。(M1)	I
	②グローバリゼーションの最初の時代とその主な特徴を記述しなさい。(M3, M4)	I
	③発展(for experts) 今日のグローバリゼーションが個人によって成り立っている過程を説明しなさい。(M4)	II
3	①1920年と今日における輸送の発達と通信コストを記述しなさい。	I
	②過去500年でなぜ世界が縮小してしまったのか、理由を述べなさい。	III
	③2つの空輸モデルの違いを比較しなさい(M5)	II
	④時速40Kmでハバナからシアトルへ移動するコンテナ船がパナマ運河を通ることによって短縮できる時間を計算しなさい。地図帳を使いなさい。	II
4	①現代の情報通信技術がなかったとしたら、あなたの人生は異なるものになっていたでしょう。どのような道に進むのか、考えてみてください。	III
	②図3に載っているデータをもとめなさい。	I
	③図2と図3を見て、デジタル・ディバイドとは何か説明してください。	II
	④アフリカ大陸に英語またはドイツ語のコールセンターを設立する機会と問題について話し合ってください。	III
5	①このページで提示された生産形態の概要を示しなさい	I
	②OEMの垂直統合の変化を述べなさい。(M6)	I
	③OEMと今日の部品提供会社の役割を説明しなさい。(M4, M6)	II
	④発展(for experts) これらの生産形態の問題点と可能性を議論しなさい。	III
6	①企業が生産施設やオフィスの最適な立地を見つけることが非常に重要であること理由を説明してください。	III
	②一部のLEDCの繊維産業がヨーロッパのものと比較して競争力を持つことになった理由を説明してください。	III
	③以下の条件の場合、どの立地因子が最も重要なかを話し合ってください。 a)製品の大量生産を行う場合 b)会社の管理本部のオフィスビルを建てる場合 c)ハイテク製品の開発を行う場合	III
7	①以下の貿易に関する用語について記述しなさい。 a)原材料(M2) b)工業製品(地図帳)	I
	②アラブ半島、ヨーロッパ連合、そして北アメリカの貿易を比較しなさい(M2, 地図帳)	II
	③ガーナとナイジェリアの貿易の条件が1995年以来、どのように変化したかを説明しなさい(M2, M3)。	II
	④発展(for experts)	II
	10-21ページを活用して、世界貿易における極端な増加を説明しなさい。	II

注：M は見開き内の番号を示す。

3) 地理的認識獲得のための地理的見方や考え方の観点

①地理的見方

ヒト・モノ・情報の輸送(流通)、および生産過程における原材料や製品の流通・貿易という事象を、位置や空間的広がり(例えば、どのようなところでアップルの製品が生産されているのか、世界貿易はどこに集中しているのか)、空間的広がり(例えば、アラブ半島、ヨーロッパ連合、北アメリカの貿易の比較)から見出ししている。

②地理的考え方

地理的事象がなぜそこでみられるのか(例えば、デジタル・ディバイドが起こる地域に規則性がみられるのか)、地理的事象の成立背景(例えば、ど

の立地因子が重要なのか=産業によって立地因子が異なる)、を追究する過程が単元構成においてみることができた。

IV. Diercke Geography Bilingualの構造

—単元「Global Disparities」の場合—

1) 内容構成

単元「Global Disparities」の内容構成は、表4に示す通りである。

本単元は8つの小単元から構成され、学習のねらいから3つの学習過程に分類した。

小単元1では、グローバリゼーションの影響と地域格差について学ぶことに焦点が当てられている。世界各国のGDPを面積で表した地図や経済格差についてどの地域で発展しているか、地域でその中心はどこなのかを表現した図を用いてグローバル化そのものは世界中すべてに恩恵をもたらすわけではないこと、また、世界で最も裕福な人物と最も貧しい人々の対比を行っており、経済的な格差、不平等が広がっていることを学ぶ。

小単元2から6では、事例学習(ケーススタディ)を通じてグローバル化によって生じた様々な影響を学習する。各小単元では、経済が発展した経緯とそれに伴って生じる影響を学習させる内容となっている。事例学習であるために、各地域に関する地誌的な学習内容もみられ、人口などの基礎情報も含まれており、学習の充実が図られている。具体的にみていくと、小単元2ではニューヨークを事例にグローバル化による発展の様子を示している。一方で、ニューヨークが発端となったリーマンショックや多文化社会についても触れられており、多くの影響が出ていることを示している。小単元3ではグローバル化による急成長の代表例でシンガポールを取り上げ、世界的な貿易の中継地として発展した経緯や今後の発展の予測についても考えるようになっている。

小単元4では、グローバル化によって生じた負の側面として、アメリカ・デトロイトを取り上げ、都市全体が衰退した状況を学習している。特に、町の中心街の広さが徐々に狭くなっていることを事例に、産業の衰退がもたらした町全体の影響まで考えさせるような内容となっている。小単元5では、アフリカのビクトリア湖を事例に、グローバル化が与えた自然環境の変化とそれらにどのように国家がどのように対応してきたのかを学習する。その中では、「ナイル・パーチ」という魚を事例に、好影響と今後の課題を説明しており、

表4 「Global Disparities」の単元構成

展開	小単元	題目	内容	資料
グローバル化の影響による経済格差の理解	1	グローバル化による世界規模で見た違い	グローバル化の影響 地域別に見た経済格差	豊かな国と貧しい国-各国のGDPによるカルトグラム (2016年) (M1) 一人当たりGDPの推移 (M2) 経済格差-中核と周辺の地域 (M3) 世界的な格差-現実 (M4) 不平等は増大しているのか? (M5)
グローバル化の影響による経済格差に関する事例学習	2	ニューヨーク-国際都市	国際都市の定義 ニューヨークの経済・文化・政治	西半球で最も高い建物であるマンハッタンの世界貿易センタービル (M1) 国際都市のランキング (M2) シェアの大きい大手の証券取引所 (M3) 世界一を誇るニューヨークの証券取引所 (M4) 世界でも有数のブロードウェイであるタイムズスクエア (M5) 国連総会 (M6) 多文化的なニューヨーク (M7)
	3	シンガポール-輸送・金融・ハイテク産業の中心	シンガポールの国家戦略 シンガポールの立地	シンガポールの港 (M1) 世界最大のコンテナ港 (M2) 東南アジアへの外国からの直接投資の額 (M3) シンガポールの発展 (M4) シンガポールの詳細 (M5) シンガポールの基礎情報 (M6)
	4	デトロイト-先進工業国の中で産業が衰退した都市	デトロイトの発展と衰退 デトロイトの再開発	デトロイトの空き地と中心業務地区 (CBD) (M1) デトロイトの人口推移 (M2) デトロイトの失業率推移 (M3) 都市の基本計画図-デトロイトの中心街の変化 (M4) デトロイトの苦闘 (M5) キャンパス・マルチウスのビーチエリア (M6) デトロイトにおける空間的变化 (M7)
	5	ビクトリア湖-かつての豊かな漁場	ビクトリア湖の生態変化 生態変化による人々への影響	ビクトリア湖の範囲 (M1) EUのナイル・パーチ切り身の輸入量 (単位1000トン) (M2) ビクトリアで行われている漁業 (M3) ナイル・パーチの年間水揚げ高 (M4) ビクトリア湖流域の人口 (M5) 水揚げされたナイル・パーチの稚魚 (M6)
	6	上海-目まぐるしく変化する都市	上海の経済発展 中国の国家戦略	1990年頃の浦東地区の風景 (M1) 浦東の基礎情報 (2015年) (M2) 今日の浦東 (財政中心地のルージャジュイ) (M3) 上海の発展と主要な場所 (M4)
グローバル化の経済的指標と観点、利点と課題への理解	7	発展水準とその指標	先進国と発展途上国の差異 経済指標による分類	タンザニアにおける教室の様子 (M1) 二人の子供のそれぞれの生活状況 (M2) 英国における教室の様子 (M3) 人間開発レポートから見る各国の開発水準 (M4) 各国の構造データ (M5)
	8	グローバル化が及ぼした影響に対する多様な見方	グローバル化の観点	グローバル化が及ぼした影響に対する多様な見方 (M1)

今後の課題として漁獲量が安定しないために経済的発展の可能性が低いということが述べられ、グローバル化に対応する上でいわゆる第一次産業で対抗する難しさにも言及している。最後に小単元6では、中国・上海における経済特区といったグローバル化に対応した地域整備やインフラ建設などを地図で示しながら学習する。全ての事例に共通する点として、グローバル化による事象を、必ず好影響と悪影響の両面から示していることが指摘できる。

これまでの事例学習を踏まえて、小単元7および8では、グローバル化の経済的指標と

観点、グローバル化の正と負の側面の理解を通じた経済格差の一般化に関する学習内容が展開される。小単元7では、国民総生産や人間開発指数など地域格差を表現した具体的な指標を用いて地域間比較を行ったり、様々な影響をもたらした結果としてタンザニアとイギリスの生活の違いに着目して生活環境の違いを明確化している。小単元8で様々なグラフや過去の有識者(偉人)が発言した内容を示したうえで、グローバル化によって発生した多くの事例に対する多様な見方を示している。その上で、単元の最終ページであるがゆえに、グローバル化

表 5 「Global Disparities」の学習活動

小単元	学習活動	分類
1	①a)M1を手掛かりに地球上における相違点を記述しなさい。	I
	b)M1といくつかの国のGDPの発達(M2)を比較しなさい。地図を使いなさい。	II
2	②「貧困の海にいくつかの富める島が浮いている」という文を説明しなさい(M3, 本文)。	II
	③特徴的だと考えた2つの事例を説明しなさい。(M4,M5)	II
	英語またはドイツ語で答えること。	II
3	①a)国際都市の特徴を述べなさい。	I
	b)それを写真で表現しなさい。	I
	②ニューヨークが国際都市である理由を説明しなさい。	II
4	③発展(For experts)	III
	インターネットを使ってロンドンが一番の国際都市になりうる理由と特徴について分析しなさい。	III
	①シンガポールの立地の利点を挙げなさい。(教科書, 地図帳)	I
5	②シンガポールの経済における港の重要性について説明しなさい。(M1, M2)	II
	③シンガポールの強みと限界を交通, 金融, ハイテク産業の点から話し合いなさい。(M3-M6)	III
	①デトロイトの経済的变化を記述しなさい。	I
6	②産業が衰退した原因と影響について説明しなさい。	II
	③デトロイトのCBDの変化を評価しなさい。	III
	①ビクトリア湖の漁業の変化を示す年表を作成しなさい。	I
7	②a)ナイール・パーチの導入が自然環境と人々に与えた影響を説明しなさい。	II
	b)発展(For experts)	III
	ナイール・パーチの導入に対する賛否を議論しなさい	III
8	①1990年代以降の上海の発展について5行で記述しなさい。	I
	②海外の投資者が上海に引き付けられる理由を説明しなさい。	II
	③上海における浦東の重要性について意見を述べなさい。	III
9	①写真を対比させなさい。(M1,M2)	II
	②先進国と途上国の区分水準を記述しなさい。(M4)	I
	③M3-M5を使用してリストを作成したうえで, 先進国と後進国に分類しなさい。	II
	④M5に使用されている発展指標の重要性を話し合いなさい。	III
	⑤英語またはドイツ語で答えなさい。	III
10	①M1のピンボードに書かれている文章と素材を使用し, グローバリゼーションのメリット, デメリットのリストを作成しなさい。	I
	②一つの意見について評価しなさい。	III
	③このマンガを分析しなさい。	II
	④ディスカッション	III
	グローバリゼーションは禍福のどちらかなのか? 英語またはドイツ語で答えなさい。	III

注：M は見開き内の番号を示す。

ンが生み出した好影響と悪影響を簡単にまとめている。

2) 学習活動

表 5 は「Global Disparities」の学習活動をまとめたものである。

小単元 1 では、学習活動が I - II に分類できることからグローバリゼーションによる経済格差に関する事実の確認、経済格差の基本的な理解に学習目標が置かれていると解釈できる。基礎的事項を学習することで事例学習で用いる考え方の参考になるように意識されている。

事例学習である小単元 2~6 では、すべての分類が各小単元にみられる。前節より事例学習では、各事例における相反する見方から事象を捉えることに重きが置かれていたために、事実の把握や

記述といったような I については、メインとなる学習活動の前段階として比較的容易な課題として設けられていた。その上で、事実影響の理由や現象の説明など地理的事象の構造・成立の背景を説明する II と地理的諸問題に関するの個人・集団の価値や解決手段を思考・判断した理由を説明する III が主な活動として設定されていた。II に関しては、例えば小単元 4 でみられるデトロイトの産業衰退の理論をまとめるといった事例から理論に結びつく内容を問うものがみられた。III に関しては、小単元 3 でみられるシンガポールの強みと限界を視点を設けてまとめるなど、事象の影響や原因、そ事象への評価をする学習活動である。II・III の学習活動については、一人で行うだけではなく学習者が協同で考察したり議論したりするように仕向けられたものも一部みられた。

小単元 7 および 8 についても、I - III の学習活動が設定されている。その中で、この単元の中心課題は法則性・理論に関する II となっている。具体的には、発展指標の重要性やグローバリゼーションそのものを評価・分類するといった活動がみられている。また、小単元 8 の最後には単元を通して扱ってきたグローバリゼーションそのものについて良いか悪いか自らの立場を明確化し、説明する III の活動も行われている。単に考えを整理し、明確化するだけではなく、単元を通して理解した内容を踏まえて、学習者がどのように考察してきたかを振り返る上での必要な学習活動である。

3) 地理的認識獲得のための地理的見方や考え方の観点

①地理的見方

地理的見方としては、グローバリゼーションの結果生まれた様々な現象について各国の事例を取り上げることを通して空間認識を持たせ、関連する問題の地域別状況も確認しながら、地理的現象の規則性を認識させようとしている。

②地理的考え方

地理的な考え方としてその地域での問題がなぜ発生しているのかを学習させ、議論などを通じて事象の原因とその影響を認識させ、地理的考え方として問題の発生状況を考慮できるような能力を育成しようとしている。

V. おわりに

国際理解に関する2つの単元では、内容構成の違いがみられる。「Globalisation」では特定の地域よりも、グローバル化に関連するヒト・モノ・情報の移動の仕組み、法則性や理論に関する学習に焦点を当てた単元の内容構成になっている。一方「Global Disparities」では特定の地域を取り上げ、そこでみられる新しい経済的事象を扱う内容が単元の多くを占めている。「ニューヨークが国際都市である理由を説明しなさい」、「シンガポールの経済における港の重要性について説明しなさい」、「デトロイトの経済的变化を記述しなさい」といった学習活動が設定されていることからわかるように、その地域における経済的事象を説明させるだけでなく、経済的な視点から地域像を形成させることもまた視野に入れておりと解釈できる。

また見開きごとに学習活動が設定されている。見開き内の学習活動を、要求領域Ⅰ～Ⅲで分類した場合、多くの見開きにおいてⅠ～Ⅲがすべて網羅されている。これは学習する地理（経済）的事象に対して、異なる学習活動から繰り返しアプローチすることが意図されている。言い換えれば、知識理解だけにとどまらず、認識し、そして問題を解決するために必要なコンピテンシーの育成を計画したような、まさに新学力育成の学習内容であると解釈できる。

また単元「Global Disparities」は、小単元1ではグローバルな視点から経済格差に関する現状を学び、小単元2～6でローカルな視点から地域の経済格差を、そして小単元7および8では再びグローバルな視点から経済発展の評価について学習する構成である。これはESDにおいて重視される「地球的視野で考え、身近なところで実践する（think globally, act locally）」という考え方に倣った内容構成であると解釈できる。これにより、学習者に対して、グローバルな視点からグローバル化という事象にともなう恩恵や経済格差を意識させ、そのうえで、地域によって経済発展や格差の発生背景や構造が異なることを具体的な地域の事例を提示することで認識させている。そ

して、これらの学習を踏まえたうえで、学習者に対してグローバル化という事象に関する価値・判断に迫る展開となっている。

文献

- 大高 皇 (2010): ドイツにおける地理教育カリキュラムと地理教育スタンダードの展開—バーデン＝ヴュルテンベルク州教育スタンダードを事例として—. 社会科教育研究, 110, 130-142.
- 阪上弘彬 (2018): 『ドイツ地理教育改革と ESD の展開』古今書院.
- 服部一秀 (2007a): ドイツ地理学会版教育スタンダードの地理学力像[その1]. 山梨大学教育人間科学部紀要, 9, 122-132.
- 服部一秀 (2007b): ドイツ地理学会版教育スタンダードの地理学力像[その2]. 山梨大学教育人間科学部紀要, 9, 133-146.
- 吉田成章 (2012): ドイツにおける教科書研究の動向に関する一考察—「学習課題」への着目と授業との関連を中心に. 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域, 61, 37-46.
- Deutsche Gesellschaft Hrsg. (2017): *Bildungsstandardsim Fach Geographie für den Mittleren Schulabschluss mit Aufgabenbeispiel*. DGfG. 9. Auflage
- Golay, D. (2013): Bilingualer Geographieunterricht. Böhn, D. und Obermaier, G. (Hrsg.): *Wörterbuch der Geographiedidaktik*. Westermann, 35-36.
- Golay, D. (2018): Bilingualer Geographieunterricht. Brucker, A., Haversath, J.B. und Schöps, A. (Hrsg.): *Geographie-Unterricht: 102 Sichtworte*. Schneider Verlag Hohengehren GmbH, 31-32.
- Hoffmann, R. (Moderation) (2017): *Dircke Geographie: For Bilingual Classes Volume2*. Westermann.
- Hoffmann, R. und Meyer, C. (2009): Bilingualer Geographieunterricht in Deutschland. *Praxis Geographie*, 5/2009, 4-7